

目次

- ・歯科理工学講座、欠損歯列補綴咬合学講座  
教授就任 ……3
- ・教授就任挨拶 武田 昭二 ……3
- ・教授就任挨拶 岡崎 定司 ……4
- ・平成21年 新年互礼会・年頭所感  
理事長・学長 川添 堯彬 ……5
- ・佐川 寛典元理事長・学長逝去 ……20
- ・第4回 人権啓発標語 ……20
- ・平成20年 秋の叙勲・褒章受章者 ……20

- ・教職員慰労会 ……20
- ・平成20年度 科学研究費補助金交付  
ならびに学内学術研究助成金交付 ……20
- ・学位（博士）授与報告 ……23
- ・図書館 HP 更新 ……24
- ・第40回 大学祭 ……24
- ・クリスマス・ミニコンサート開催 ……25
- ・人 事 ……25
- ・あ と が き ……25



平成21年 新年互礼会年頭所感 川添 堯彬理事長・学長（平成21年1月5日）

### 歯科理工学講座、欠損歯列補綴咬合学 講座教授就任

平成20年10月1日付けで、歯科理工学講座の教授に武田昭二先生、欠損歯列補綴咬合学講座の教授に岡崎定司先生がそれぞれ就任された。

### 教授就任挨拶 歯科理工学講座 武田 昭二

平成20年10月1日付をもちまして、中村正明教授の後任として歯科理工学講座を担当させていただくこととなりました。大学が創立100周年を迎えようとしているこの時期に就任しましたことは誠に光栄であります。微力ではありますが、大学ならびに講座の発展のために全力をもって職務を全うする所存でございますので、何卒よろしくご指導をいただきますようお願い申し上げます。



就任にあたりまして私の抱負を述べさせていただきます。

#### 教育に対する抱負

歯科理工学は歯科医療に欠かせない歯科材料・器械の基礎科学と応用科学に関する学問であり、取り扱う領域は金属、高分子およびセラミックスという材料の基礎科学から歯科臨床における歯科材料・器械の使用方法に至るまで非常に幅広い範囲を包含しています。また、新しい歯科材料・器械の開発によって歯科理工学の内容も日進月歩で発展しています。これら高度な専門知識にも十分に対応できる基礎学力と応用力を持った学生を育てる教育が社会的に要求されるようになってきています。

一方で、学力の低下がさげばれ、学生の質の低下とインセンティブ・デバイド（意欲の格差拡大）は、大学の教育現場にも少なからず影響を及ぼしています。本来の大学教育においては、学生は高校時代に学んだ知識をもとに新しい知識を受け入れながら、未知の歯

科領域のことを自分の力で理解していき、同時にそのことの大切さを学ぶことであります。しかし、現在の学生は、自分自身に対する自己認識や将来の社会での自分の役割という社会認識に欠けているのではないのでしょうか。いま求められている大学の授業で必要なことは、学生が自主的に学習する意欲を育てることであると思います。そのために、教師の知識の単なる伝達という考え方から、教師の知識と学生の知識が相互に作用し合い、お互いが影響を与え合うような授業を通じて学生の歯科理工学への興味と知識欲を刺激し、自主的学習への意欲を向上させて応用のきく学生を育てていくことが必要であると考えます。

そのために歯科理工学の講義・実習において教育者として自らの知識の向上と教授方法の日々の革新を行うよう努力していきたいと思っております。そのことによって、未知のことを自分の力で理解していき、同時にそのことの大切さを学ぶ場を提供し、何故という知的好奇心を抱き、自ら課題を設定し、その問題を解決できる能力を有する学生を育てていきたいと思っております。その結果は、共用試験や歯科医師国家試験の合格のみならず、将来の人類の健康と福祉に貢献しうる歯科医師の道を歩むようになると思っております。

#### 研究に対する抱負

歯科理工学講座は、従来、口腔顎顔面領域の健康回復のために用いられる歯科生体材料について *in vitro* における生物学的な評価を研究の基軸と位置づけてきました。そして、歯科生体材料に対する生物学的判定基準に一定の成果をあげ、生物物理学という一学問領域を築き上げてきました。今後もこの研究方針を継承し、歯科生体材料の開発にとって避けて通ることのできない *in vitro* における生物学的評価法の開発につとめ、生物学的評価法の発展や規格化に寄与し、より安全な歯科生体材料の開発に貢献していきたいと思っております。

一方で、生物学的観点からの歯科生体材料の創製に力点をおいた研究を行って必要性があります。近年の歯科生体材料の研究は、従来の材料主体から再生医療に関連する材料へとシフトしております。しかし、従来の歯科生体材料においても臨床の場で十分に満足していくものとは限りません。歯科生体材料が長期に安定な機能を維持するために、更なる材料の進歩が求めら

られています。現在の加工技術の進歩は、ナノレベルでの材料の制御が可能と成りつつあります。とくに、表面構造を生体組織に類似したナノレベルで制御することは、細胞と材料の適合性にとって重要な課題であります。そこで、歯科生体材料表面にナノレベルの表面加工を行い、生体親和性に優れ、なおかつ機能性を有する歯科生体材料の開発を目指していきたいと思えます。そのために、臨床医、工学研究者およびメーカーの有機的な結合を図るべく、幅広く内外の他の講座や他の研究機関との連携を進めていきたいと思えます。

終わりに、先輩の諸先生方が築き上げてこられた伝統を大切に、歯科医療に少しでも貢献できるように更なる発展を求めて講座員とともに教育・研究を進めて参りたいと思えます。さらに、次世代の大学を担う人材の育成にも努めて参りますのでよろしくお願い致します。

**歯科理工学講座教授**

**武田 昭二 (たけだ しょうじ)**

歯学博士

昭和21年生まれ、61歳

< 学 歴 >

- 昭和42年4月 京都工芸繊維大学入学
- 昭和46年3月 京都工芸繊維大学卒業
- 昭和46年4月 京都工芸繊維大学大学院工芸学研究科修士課程入学
- 昭和48年3月 京都工芸繊維大学大学院工芸学研究科修士課程修了
- 昭和56年12月 歯学博士学位取得 (大阪歯科大学)
- < 職 歴 >
- 昭和48年4月 大阪歯科大学助手 (歯科理工学講座)
- 昭和55年5月 大阪歯科大学大学院助手 (歯科理工学)
- 昭和59年4月 大阪歯科大学講師 (歯科理工学講座)
- 昭和63年4月 大阪歯科大学大学院講師 (歯科理工学)
- 平成元年4月 大阪歯科大学助教授 (歯科理工学講座)
- 平成元年5月 大阪歯科大学大学院助教授 (歯科理工学)
- 平成19年4月 大阪歯科大学准教授 (歯科理工学講座)
- 平成19年4月 大阪歯科大学大学院准教授 (歯科理工学)
- 平成20年10月 大阪歯科大学教授 (歯科理工学講座)
- 平成20年12月 大阪歯科大学大学院教授 (歯科理工学)



**教授就任挨拶**  
**欠損歯列補綴咬合学講座 岡崎 定司**



昨年10月1日に、欠損歯列補綴咬合学講座教授を拝命いたしました岡崎定司です。広報誌の紙面をお借りしまして、皆様へのご挨拶、またこれからの抱負につきまして、思うところを述べさせていただきます。



**教育に対する抱負**

まず、本学の発展のためには、高い水準の教育スキルを持った人材の育成が何より重要です。ヘルスケアだけでなく、ITテクノロジーやバイオテクノロジーにも精通した教育スタッフの育成を行わなければなりません。そのためには、FDに積極的に関わっていくのはもちろんですが、講座および大学が主催する相互研修や外部研修などにも積極的に参加し、また関わり、優れた知識とテクニックを取り入れ、維持・発展させていきたいと考えています。

また、学生の講義には、サイバー技術を取り入れて効率化をはかるとともに、実習においては少人数によるグループワークを中心とした構成を基本とし、対応するスタッフを増員させることで、さらにきめ細やかな指導が出来るよう配慮してまいります。

**研究・臨床に対する抱負**

これまで、私は、臨床講座の一員として患者の治療と学生の教育の両方に携わってきましたが、同時に、歯科医学の研究成果が人々の健康に寄与するものなることを理想として、基礎歯学における解析法の臨床診断への応用を微力ながら進めてきました。しかし、私のような臨床と基礎の狭間を埋めるようなジャンルの研究は日本の専門学会の中だけでは、「井の中の蛙」状態であると感じ、大学院卒業後は海外に目を向け、IADRなどの国際学会に積極的に参加するよう心がけて参りました。

現在、私は、英国の「プライベート・デンティストリー誌」の編集委員をしております。日本の「歯界展望」や「デンタル・ダイヤモンド」のような歯科総合

誌であります。この雑誌におきまして、編集委員としていろいろと助言、また誌面にて発表もさせていただいています。一方、講座の前田准教授や故内田助教は“Journal of Oral Rehabilitation”や“Archives of Oral Biology”など、臨床系および基礎系の欧米の歯科雑誌に投稿した実績があります。講座員には、あとに続いてどしどしチャレンジしてほしいと思います。

さらに、外部資金の調達も積極的に得ていこうと思っています。科研の審査を受ける分野の学会には積極的に参加し、科研を得るためのいろいろな情報を仕入れたいと思いますし、講座員にも積極的に参加し情報収集してもらいたいと思います。講座で得られた知見や情報は特許や実用新案等がとれるものであれば、チャレンジしていきます。

どうかこれからも、皆様方のご支援を頂戴出来ることを切にお願いし、就任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

**欠損歯列補綴咬合学講座教授**

**岡崎 定司 (おかざき じょうじ)**

歯学博士

昭和29年生まれ, 54歳

<学 歴>

- 昭和48年4月 大阪歯科大学入学
- 昭和54年3月 大阪歯科大学卒業
- 昭和55年4月 大阪歯科大学大学院歯学研究科  
博士課程入学
- 昭和59年3月 大阪歯科大学大学院歯学研究科  
博士課程修了
- 昭和59年3月 歯学博士学位取得 (大阪歯科大学)
- <職 歴>
- 昭和59年4月 大阪歯科大学助手 (歯科補綴学第一講座)
- 平成 5年5月 大阪歯科大学大学院助手 (歯科補綴学1)
- 平成 8年5月 大阪歯科大学大学院講師 (歯科補綴学1)
- 平成 9年4月 大阪歯科大学講師 (歯科補綴学第一講座)
- 平成12年4月 大阪歯科大学講師 (高齢者歯科学講座)
- 平成15年3月 大阪歯科大学助教授 (高齢者歯科学講座)
- 平成15年4月 大阪歯科大学大学院助教授 (高齢者歯科学)
- 平成19年4月 大阪歯科大学准教授 (高齢者歯科学講座)
- 平成19年4月 大阪歯科大学大学院准教授 (高齢者歯科学)
- 平成20年10月 大阪歯科大学教授 (欠損歯列補綴咬合学講座)
- 平成20年10月 大阪歯科大学大学院教授 (欠損歯列補綴咬合学)

平成21年新年互礼会・年頭所感  
理事長・学長 川添 堯彬



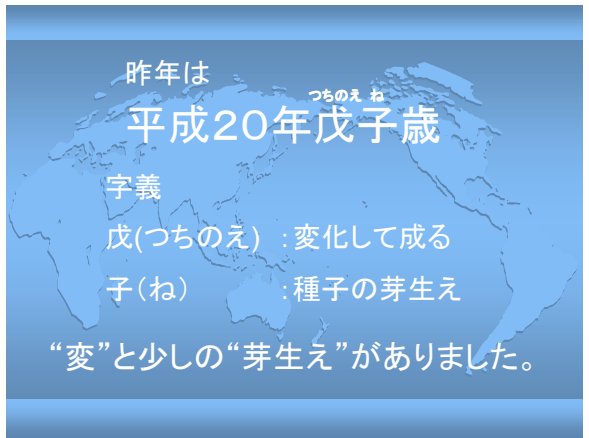
平成21年1月5日(月)午前11時から、本学講堂において平成21年新年互礼会が開催された。多数の本学教職員、関係者が出席のもと、川添堯彬理事長・学長が年頭の挨拶を述べた。

**一年頭所感**

この席で年頭所感を述べさせていただきますのが、二回目でございます。昨年の例に倣いまして、昨年たてた事業計画、あるいはそれらの所感をその後、どのように、どこまで進んで、またどこからができていないかということから入りたいと思います。



(はい、次お願いします。)

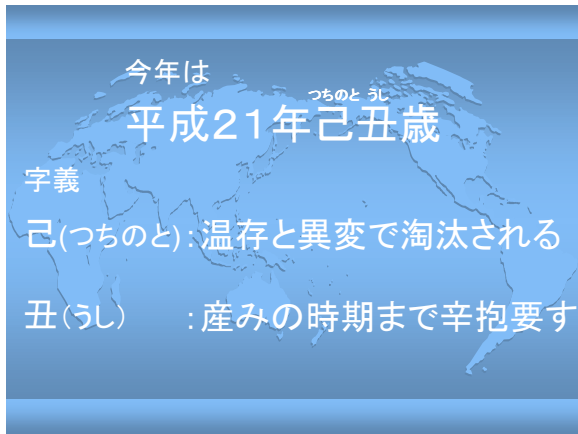


昨年は平成20年戊子の年ということで、このスライ

ドはほとんど昨年そのままでございますけれども、戊は変化，“変”という字があります。子は種子が“芽生える”，あるいは胎児が着床するという，そういった意味があるようでございます。例年12月には恒例の清水寺の貫主さんが，一年にあった出来事を総括して一つの文字にする，そして書にするというということが行われています。そして昨年の12月に，平成20年は変化の“変”という字が選ばれました。ご承知の通りでございます。それと，少しの“芽生え”があったというのが私の感想で，これは偶然かどうか，本当に，日本の世の中全体にも大きな変があった。あるいは歯科新聞には，ここへ大きい字と書いて，“大変な歯科界”という，大きな変というのがありました。

本学にとりましても薬物，大麻所持で逮捕されるとか，いろんな思わしくない出来事もありましたし，経済危機に，金融危機に臨んで，すんでのところというのが助かったり，いろんなことがあったわけでございます。と同時に，これは私自身の中でも，あるいは本学にとりましても，いくつかの少しの“芽生え”もあったのではないかとということで，たかが暦でございますけれども，実にあたっていた面もあるのではないかという思いでございます。

(次お願いします。)



今年かというと，平成21年は己の丑ということになります。己は“温存”ということで，これは，うまくいったからこれを大事に残そう，来年度にも継続して残そうという保守的な面と，もう一つは“異変”ということですので，やはり今年も，なにか異変が起こるようでございます。それらが両方起こって，そして淘汰されるというのが，字句に現れています。

それから丑は，“ひも”を表す。ひもは胎児の臍帯とか，臍の緒の帯のようなひもを表して，まだそれが産まれるところまではいっていないということで，このシンボルは“忍耐”ということであるようです。ですから，着床はしているのですから，その成果が現れることは確かなのですけれども，この一年はもう少し辛抱が必要だというようなことが現れております。これが当たりますかどうかという事で，私は本学の運営，管理の面でこの二つの言葉を見つめたいと思います。

(はい，次お願いします。)



今年も理事長，学長と併せて，年頭所感とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

(はい，次お願いします。)



「この時勢に怯(ひる)まず怯(おび)えず，威风堂々と，こって牛」ということで，これが「このように行けばいいのになあ」という私の願いでございます。

(はい，次お願いします。)

## 建学の精神

■歯科医療における**専門的知識、技能**の重要性を自覚させ、旺盛なる**研究意欲**を醸成し、自ら選んだ道に強い**使命感**をもつとともに、社会に対する**奉仕的人生観**を体得させ、さらに健康にして活動力のある**情操豊かな人間形成**をおこなう。

昨年と同じことになりますが、本学には、立派な建学の精神がございます。これを、もう一度またかみしめていただきたいと思うわけでございますけれども、古くに作られても、今尚、非常に新鮮な内容でありまして、大切なことが殆ど含まれております。すなわち、「歯科医療における専門技術、技能の重要性を自覚させ、旺盛なる研究意欲を醸成し、自ら選んだ道に強い使命感を持つと共に、社会に対する奉仕的人生観を体得させ、さらに健康にして、活動力のある情操豊かな人間形成を行う」。これが本学の、どこに出しても恥ずかしくない立派な建学の精神であると思います。

ただし、現在ここ数年、昨年来、あるいは少し前からしますと、これに少し足りない面も現れてきたかなあという気がいたします。それをこれから述べるわけでございます。それは“入口”の問題ですね。それと“出口”の問題。入口と出口の問題に少し追加が必要になってきたのではないかという思いでございます。

### —事業計画について—

(次をお願いします。)

## 事業計画(平成19~20年度)

- I. 大学の管理・運営
- II. 教学(教育、研究)
- III. 附属病院
- IV. 教員組織改正に伴う対応
- V. 情報社会、IT時代への対応
- VI. 両専門学校の現状と将来像
- VII. その他の事業

今井前理事長の時にたてられた平成19年度のこと、それから平成20年度、昨年4月以降、まだ三月残っていますけれども、その事業計画を七つの大きな柱でもって眺めてみたいというふうに思います。

(次をお願いします。)

## これまでの事業計画 (達成済み及び進行中)

### I. 大学の管理・運営-a

- 1. 支出経費の節減 - 全体平均2~5%減
- 2. 給与規程等の改正, 定年年齢の改定
- 3. 教員任期制の実施 - 平成20年度以降
- 4. 両専門学校の財政等改善策
- 5. 公開講座, オープンキャンパス, HP等の充実強化

これまでの事業計画の中で、達成済みのものと進行中のものを拾ってみました。まず、一つは大学の管理運営面で、これは支出経費の節減ということで、予算委員長はじめ、非常にご尽力ご努力をいただいて、少しずつ、いろいろ膨らみがちになる支出経費をできる限り抑えていただいているということでございます。それから、これももう既に済みましたけれども、給与規定等の改正が昨年達成され、また定年年齢の改訂も、もう今井前理事長の時から練られて、それを実施する段階になっておるわけでございます。

それから、三つ目は任期制の実施。これも、その時に私が副学長でありまして、早く教員評価を作り、それが完成するのを期待するというのを非常に強く言われておりました。そして、やっと昨年の11月に、後で紹介いたしますけれども、教員評価が、立派にと言いますか、一応教授会の承認も得て、理事会の承認も得て、もう今年度末から、平成20年度から実施するという段階にっております。そうなりますと、この任期制は平成20年度になって採用されました教員に対しましては、全部その通り適用されているわけでございますけれども、まだそれ以前の方にはそこまで行っておりません。

それから、両専門学校、技工士専門学校と衛生士専門学校の財政等の改善策。これも理事会で改善策の委員会を作っただいて、いろいろな面から考えて、

ここ暫くはできるだけ、財政等の改善を鋭意努力していただくということで、次への新しい展開については、今すぐには決めるべきではないという結論になって進んでおります。

さらに、去年相当やっていただきましたのは、公開講座の新しい展開。川合教授が公開講座委員長になって、新しいタイプの第二世代の公開講座を展開するようになっております。

また、オープンキャンパスは3回やって大変効果があったと思います。特に、我々教員側、教職員側があてがい扶持ではなくて、現実には3年生4年生の学生が参加して、プレゼンを行って、集まった父兄、あるいは本人を感動させたりする場面もあって、非常にこのオープンキャンパス、これから始まる入試にもいい影響があるものと思って期待しております。それから、ホームページ等は委員会を作って充実強化も進めております。

### 一授業料の減額・学生定員について一

(はい、お願いします。)

**これまでの事業計画** (達成済み及び進行中)

**I. 大学の管理・運営-b**

1. 学生授業料の減額を検討した。
  - 1) 受験者数の減少抑止
  - 2) 入学生の学力低下の防止
2. 入学を10%削減しても運営可能か。
  - 1) 13名削減の時がくる。(1学年115名に)
  - 2) 財政基盤の改善、強化
3. 教職員の「兼業」の適正化
  - 1) 教育力の低下防止
  - 2) 病院収入の低下防止

それから、大学の管理運営面の“b”ですけれども、学生の授業料の減額をして欲しいと理事会をお願いして、これは減額が果たされました。それで、これはできるだけ早くやらないとという緊迫感もありまして、受験者数の減少の抑止とか、あるいは入学生の学力低下の防止ということから、あるいは全国で二番目に高い授業料を持った本学でありましたけれども、それを思い切って、将来のためにこれを減額することができました。後でもう少し述べます。

それから、昨年、入学定員を10%削減しても運営可能かという命題をやりましたところ、そのことがだい

ぶ東京の方に伝わって少し誤解を生んだのですけれども、やはりこれも引き続き、そういうことを常に想定しておかないといけないと思います。しかし、この一年間で、これから述べます改革、入口の改革、出口の国家試験の改革、合格率の改革を達成すると、定員を削減しなくても行けるのではないかというふうに、少し昨年よりも楽観的というか、明るい方向へ持って行っていますけれども、最後まで、つまり歯科大学協会の段階においてですけれども、本学は10%も削減したくないということで、できるだけ同窓の子弟始め、優秀な学生を採りたいという方向に進みたいということまで行きたい。定員削減にかなり抵抗できるのではないかというふうにも思っております。改革次第ですけれども。

それから、財務関係で、これも宿題になっておったのですけれども、教職員の兼業の適正化というのがあります。やっぱり、同類のこういった医科大学、あるいは国立大学の医学部、歯学部、そういった所では、もう常識化されていることでも、本学では、それらの基準がないということがあって、今後これは教育の低下とか、病院収入の低下に結びつく恐れがありますので、今後の、まだ進行中といいますか、これからの問題となっております。

(お願いします。)

**改正後の学納金(入学時)** 平成21年4月1日～

<現行>

入学金	600,000円	
教育充実費	3,900,000円	<5,900,000>
授業料(前学期分)	1,900,000円	<2,000,000>
後学期分は1,900,000円。ただし、納期は10月		
施設維持費(前学期分)	350,000円	<750,000>
後学期分は350,000円。ただし、納期は10月		
合計	6,750,000	<9,250,000>

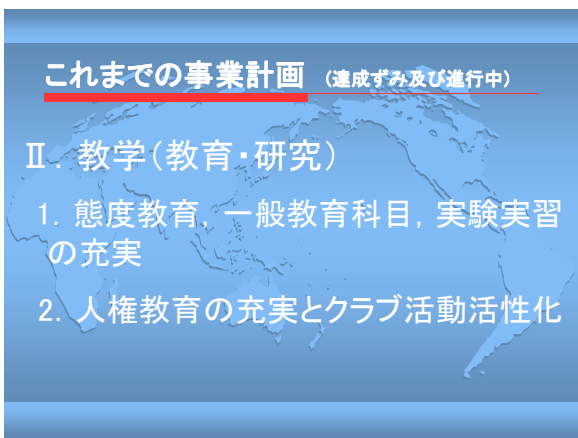
先程少し述べました、授業料、学費の減額の具体的な額でございますけれども、これはもうこの4月1日から、今年の入学者からやるということを全国に公開して発表しておるものでございます。それで、この中に入っているのが、枠の中に入っているのが改正後ということで、特にアンダーラインがある所は、現行は

この外側に、枠の外側に書いてあるもので、それから減額している額をここに書いてあります。ですから、今後は、入学時の初年度の納入金は675万円になったわけです。従来は925万円だったのが250万ほど安くなっているということになるかと思えます。

そういうことで、これだけ下げて、ほぼ私立歯科大学の真中ぐらいの形、鶴見大学とほぼ同じぐらいの額になります。しかし、今後のことを考えると、もし本学の募集力がさらに低下した場合には、東京歯科、あるいは愛知学院、この二校が募集力のアップに見事成功しており、質のいい学生を大阪まで採りに来ているというところがありますので、何とかそれに倣い、この二校並に、経営を工夫してやれないかというのが、更に欲張った考えでございますけれども、これをしなくても本学の募集力が、2倍3倍に競争倍率が上がっていくようであれば、もうそれに越したことはありません。

— 教学面について —

(はい、次お願いします。)

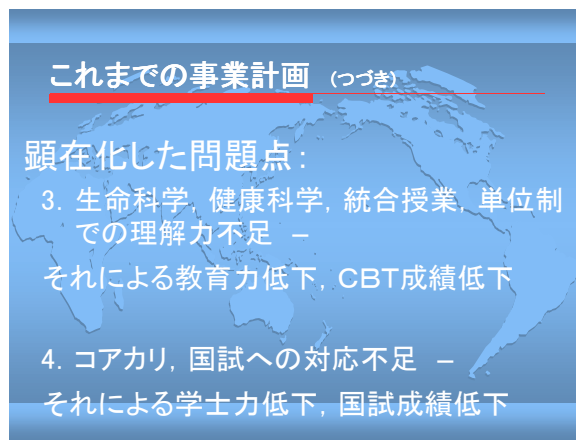


それから、引き続きこれまでの事業計画の教学の面です。現在のカリキュラム2000という、統合カリキュラム、単位制というのを主体としたもので、態度教育とかその他の教養教育も充実させておりますので、スライドにあります1番と2番というのはかなり充実しております。態度教育、これも1年生から2年生、3年生、4年生まで、ずっと続けていて、少しずつその成果も出てきているのでございますけれども、しかし、ああいった薬物問題のこともありますので、早速いろいろな対策の手を引き続き打たないといけないので、そういう面ではまだこれで十分かどうかはわかりませ

んけれども、その他一般教養系の科目、こういったものの充実、他大学に比べても非常に充実しているのではないかと考えております。

また、人権教育も相当やられているのではないかと感じがします。クラブ活動の活性化。これも、かなり時間と費用と、それと物心両面でのこ入れを、本学は非常に恵まれてやっている。他の同系の大学に比べて、非常に恵まれた環境でクラブ活動を学生はやっている。ただし、体育系にしても学生の40%がクラブ所属範囲ということで、これは依然としてそう大きく広くはありません。しかし、ここにあまり、私はこれ以上力を入れていると本来の学力が、教育力、学士力が疎かになるというか、もっとそれ以上に、注力しないと、力を入れないといけない面がここであるということが、この1年間にくっきりと顕在化してきた問題点ではないかと思えます。

(はい、次お願いします。)



それは、本学のこのカリキュラムの特徴である基礎科学であります生命科学、臨床科目であります健康科学、そしてそれらを講座単位でやるのではなくて、統合化して1年生からやっていく統合主体の授業、それから単位制という、この四つがというか、これが特徴でありますけれども、これがどうも本当の教育力を発揮していない、理解力不足もあって、それじゃもっと留年するはずじゃないかというのですけれど、単位制のために、1年生から2年生でも、成績が悪くても、そのまま上へ上がれるようになっているわけですね。2年で単位を取ればいいのか、それでまた次の上で単位を取ればいいのか、遅れ遅れになるという。こういう状態を続けておりますと、卒業する時点で、卒業試験



でもって、どさっと大きく留年、あるいは退学という羽目になって、上で溜まってくると感じるようになるんじゃないかということで、ここを何とか次のカリキュラムで、この教育力低下、CBT成績低下ということをかバーしていかないと、本来の目的は達成されないのではないかと。

もう一点は、コア・カリというのが、CBTと同じですけれども、4年生の終わった時点で文部省管轄の国家試験だといわれている第一回目の国家試験に当たるもの、これに一回で本試験に通るかどうかが、その1年生から4年生までの教育を一通り習った者のバロメーターになるのですね。だから、それが次の国家試験、本物の国家試験のことが占めるわけですね。本学は、ややそれが低下気味で、再試験でかろうじて何とか通っているという、そして病院生に上られるという状態でございます。このコア・カリが重要になる、CBTが重要になる、益々これから学力を増すためには必要になる、ということが言われております。

そして、もう一つは国試への対応策がどうも少しまだ足りないのではないかと。学士力というのは卒業する時点での実力のことで、学士試験1,2等に象徴されるものでございます。これが少し低下している。それから国家試験のランキングですね。成績が低迷するとすればこのあたりに問題がある。5年、6年の辺りをみっちり教育すれば、この卒業試験をクリアして、国家試験の成績も上がるというところまでわかってきた。この二つ、表の3と4がはっきりと顕在化したということが、この一年の大きな収穫であります。

(はい、次お願いします。)

**これまでの事業計画 (つづき)**

『大学院教育』

1. 院生増強 - 学生数を増やしたい
2. 将来の教員人材育成に資する。
3. 海外留学奨励 - 帰国後採用支援

これまでの事業計画の続きですけど、一方で大学院

教育もこれから、文科省もできるだけ大学院を増やすようにするというので、量的整備とか院生の増強とか言っているわけです。本学にとっても、この大学院生を増やすことは、学生をあまり増やせない状況ですので、メリットがいろいろあります。将来の人材を育成するのも、大学院はやっぱり必要ということに繋がりますし、研究を進めるのもそうですし、財政的にもそうです。韓国なんかではもう殆ど大学院を必須にしている、即ち11年間は今後もこれからの歯学部教育には必要だというふうでやっておるわけで、これがもう半数以上の、やれるところからどんどんそういうふうにしておるわけです。ですから、6年プラス1年プラス大学院ということで、7年プラス4年で11年。11年間は歯学部へ行くと、もうこれは一人前になるまでに、どうしても続けて行かないといけないのだというのが、韓国の重点大学の様式でございます。

本学は少しまだ大学院の定員に足りない。ちょっと気になるのは、本学の学生が大学院をあまり望まないということで、少し気になるところでございます。これを何とか、今後しないといけないということですね。そういったことで、大学院を出て海外留学を奨励して帰国した後、それを少しでも採用面などで支援してやることによって、大学院へもっと行こう、そして、その後の人生設計に活かして行こう、あるいは大学で引き続き教育・研究に従事しようという人が増えてくるようであれば、人材育成は達成できないのではないかと。ですから、ここも、大学院教育もそちらへ続かないと成果が上がらないような気がいたします。

—研究面について—

(次お願いします。)

**これまでの事業計画 (つづき)**

『研究』

1. 教員全員に科学研究費補助金への申請を義務づける。
2. 研究論文数を増やす。
3. 英文論文数を増やす。

そして研究でございます。研究は、科研、一応、これは今井理事長の時から、教員全体に科研の補助金への申請を義務付けるということで行って来ていて、大分それが、一昨年は66名ですか、昨年は13名が申請を行っていない人がいますが、この人たちを0にする、申請者を100%にする必要があると思います。研究ができない立場にあるとか、でも研究者番号を持っているのですね、教員は。それは言い訳にならない。研究はしたくないと言っても、教育をすることによって科研費を、教育の面で科研費を申請することもできる訳ですし、それから最近では定年退職する前1年、あるいはしてからでも、科研費は申請できるのですね。ですから、やっぱりこれを避けて通るということは、どうもこちらにウエイトを置いていない証拠ですし、みすみす我々の権利を放棄している。やはり、申請しないと外部資金は、補助金は当たらない訳ですから、これはもう是非すべきだと。それと、研究の重要性が付加されると言いますか、そういったことですね。それから、もう既にそういったことはやっている教員にとっては、研究論文数をできる限り増やす。しかも、英文論文数も増やさないと、全国的に通用するような教員が生まれません。

例えば、私の、学長の元へは全国の国公立大学や各種機関から随分と色々な公募が来ます。そして、それらに応募させてやりたくても、本学の教員では英文数が、論文が少ないとか、研究論文数が少ないという故に、公募に応じられない、応じても全然勝負にならないということになってくる訳ですね。それから、更に本学でも教員資格として、上に上がるためには、あまりにも論文数が少ない、研究をしてない。また教授になるにも、そちらの方の将来設計も立ちにくいということになってくるのではないかと思います。

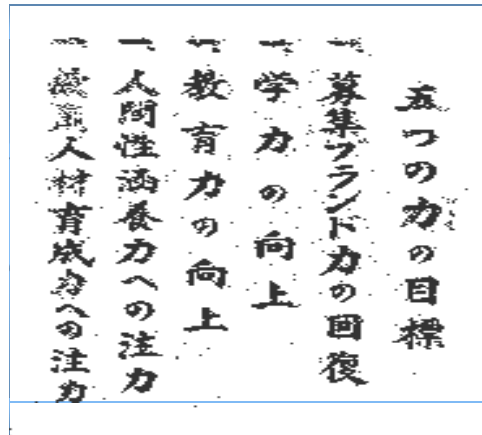
— これからの重点計画 —

(次をお願いします。)

今までが過去2年間におきます、メインは1年ですけども、事業計画からの考察でございます。さて、これから、実際は平成21年度からなのですけど、一部平成20年度の分を引き摺っておりますので、これからの重点計画はどう進もうとしているのかということをお述べてと思います。教学における“5つの力(りよく)の目標”というのを立てました。



(はい、次をお願いします。)



まず、募集ブランド力というのは入口の問題ですね。それから、学力。学力は入学時の学力、CBTまでの学力、そして学士試験の学力、学士試験の学力というのは国家試験の学力なのですけれども、この三つの学力を向上させる必要がございます。教育力というのは先生の教える力というニュアンスが強いですね。これも、随所々々で、カリキュラムをできるだけ効果的なものに、時代にあったものに、思い切って変えていくのも教育力の向上の一つに挙げましょう。

それから、人間性涵養力というのは、これは、もう少し、態度教育が十分充足されているとはいえ、やはりまだこれは引き続きやって、医療倫理、あるいは歯科医師になるのに必要な人間性を創っていかないと、患者さんから支持されるような歯科医は生まれません。本学の建学の精神にも、この人間性というのはもう昔から謳われているのですね。ですから、特に今の時代、学生の質は変わってきていますので、家庭の躰でできない部分を、我々、歳いった者は道徳教育というのを

やりたいのですけど、道徳教育というのを標榜しますと、そっぽを向かれてしまうので、なかなかそれができないのですけれども、何らかの形でこれをやらないといけない。

それから、最後に非常に急務となっております人材育成のことでございます。

(はい、次をお願いします。)

**背景 - 歯科大学を取り巻く逆風** 重点計画

1. 十八歳人口の減少と定員割れ
2. 歯科医師過剰とのマスコミ喧伝
3. 医学部定員増平成21年度実施による影響
4. 歯学部入学定員の10%削減要請
5. 定員割れ大学への補助金カット方針
6. 国試合格基準の引き上げ(相対評価の強化)
7. 入口と出口の3年連続低迷による大学の危機
8. 百年に一度といわれる経済不況

なぜ、“5つの力の目標”が必要かという背景でございますけれども、まず、八つほど、最近のこの1年間のことを選んできました。18歳人口の減少が歯学部に来て来ないと思われていたのが、遂に幾つかの大学で定員割れが起こったということ、これは全くの“変”でありまして、大変な“変”でございます。歯科大学で、定員割れが起こるなんていうことは、今までのブランド力からすると本当に考えられない。

また、歯科医師過剰である、過剰であるということをもマスコミが喧伝いたします。もう、新聞紙上とかテレビとかまで、あるいは雑誌にも出ます。そこへ持ってきて、この医学部定員増ですね、いろいろたらい回し事件もあつたりして、医者が足りないということに端を発して、医学部の定員増が、これは平成22年から平成23年からやるように文科省が、実は策定していた案件なのですけれども、それがあまりにも社会面を賑わすものですから、慌てて今年からやるというふうになりました。そこで、相当予算をつぎ込んでいますので、690何人、700人近く、もう増やすということを発表してしまいましたので、今年の入試から、もう700人増でもって入試戦争が始まるわけでございます。

4番目には歯学部の入学定員の10%削減要請。これは、文科省からも来ますし、それから厚労省からも来

ますし、歯科医師会からも寄せられるもので、これは引き続きそういうふうにもう10%減らしてくれという形で圧力がかかってくると思われま。定員割れの大学へは、募集定員を減らさないと何%定員割れしているということで、補助金をその分カットされる、経常費補助金をカットされるようでございます。これも、私立大学はみな、びっくりしてしまって、何とか定員確保のため、少々成績の悪い人でもなるべく入学させてくださいみたいに言うのですけれども、国家試験のあるような大学はそういう訳にもいかないのですね。非常に二律背反の痛し痒しという所があります。

それから6番目には国家試験の合格基準の引き上げですね。これはこれまで絶対評価していたのが、もう相対評価を堂々とやる。文科大臣と厚労大臣の確認書というのが平成18年に交わされまして、あれ以来、もう堂々と国家試験を作る人に、あれを作成委員会では、確認書というのを壁に貼ったその下で問題を作成しているようですから、もうそれが目に入ったら、段々と問題が難しくなっていくわけですね。それで、それも相対評価ということで、今年は何人しか合格者を出さない、とかいうことで、この基準を決めるものですから、ますます出口を狭くされてしまう。すなわち入口～入学、出口～国家試験の、どちらかが3年連続低迷した所は、もうこれは学生を養成する、医育機関とは見做さないという、そういうニュースをキャッチいたしまして、これは大変だということで、募集定員がもし定員割れしそうな所は減らしておけば、辛うじて募集定員までは採れているという、入学させているということになって免れるのですけれども。それから、国家試験の合格率が3年連続低迷というのは、どうやら合格率が3年連続で50%以下というふうなことになりますと、法科大学院のような感じで、大学を閉鎖することができるという、あれが一つの例となっています。大学は潰さないけれども募集をやめさせるということができる、法的にできる。そういう法律ができていようございますので、それに陥ってはいけません。すなわち、入口と出口を、よくこの数値的に、それが上昇するか低迷するかをよく見ておかないと危なくなる。

それに加えて、もう既に入学している人に気の毒なのですけれども、いろんな企業において、会社が倒産したとか、職を失ったとか、そういうことに親がなった

とかで、経済不況でもって、それで学業が続けられない。随分本学には奨学資金等の手厚い制度がありますがけれども、それさえも、なかなか足りないというふうなことの事態になりつつあります。こういった八つの逆風に対して何とかしないといけないと考えると、自ずと見えてくるものがある。教学では、すなわち端的に最もシンプル化して言うと、入口と出口をしっかりとしないと。

### —教学における重点目標—

(はい、次お願いします。)

大学存立危機からの脱出目標 重点計画

I. 教学-a

1. 入試募集ブランド力の回復: 受験倍率3倍以上
2. 国試に合格できる**入試学力**: 第一次学力
3. 本試合格できる**CBT学力**: 第二次学力・**教育力**  
プラス人間性涵養力 : **教育力**
4. 国試95%以上合格できる**学士力**: 第三次学力  
プラス病院実習, 倫理学習, 動機付け: **教育力**

そこで、大学存立危機。特に、これは歯科大学という意味なのですけれども。まず、入試ブランド力の回復。この受験倍率が安全圏というのが3倍以上だそうですね。2倍というのは、どうもこれは全入とあまり意味が変わらない。全入ですともものすごく成績が落ちるということですので、3コマ何倍という倍率を獲得した場合には、これはかなり質のいい学生が入ってくるということのようでございます。国立でも、一時、去年鹿児島大学の歯学部で2コマ何倍ということがあったので学内で大騒ぎになって、何とか国立大学で2倍なんていう所があったかということではびっくりしたという、大騒ぎしていました。

それから2番目。国試に合格できる入試学力。これを第一次学力といいます。入試時点での学力ですね。これをできるだけ上げるには、入試倍率を上げるだけでも効果があると思います。

3番目、本試合格できるCBT学力。CBTというのは、如何に上手に学生に教えたかということのバロメーターでありますし、それには自分で学習する成績のいい、基礎学力の成績のいい人を集めれば、それほど教育力

に苦労しなくてもいくのでしょうか、そうでない場合は非常にきめ細かな教育力が要求される。しかし、やっぱりこれ全国统一試験ですので、まるでこれは、開き直れば国家試験と同じことなのですね。これを本試合格しないと意味ないんですね。今は再試験というのに通れば上に上げるようにできますけれども、これをいきなり本試だけのシステムに、もう何時変えられるかわからないということになった場合、我々は再試に頼るような教育力では、これはいかん、第二次学力のアップ、これが必要。この時に、人間性涵養力も一緒に出して、これも教育力を出す。これに力を入れると自然に第二次学力がアップするということもありますので、ここでこれをつぎ込むということですね。すなわち1年生から4年生の間に、もう人間性涵養力をやる。

4番目、最後、出口ですけれども、国試に95%以上、これは現役の話ですけれども、95%以上合格できる力を第三次学力というわけですから、これをクリアすると、私立ですと上位3位に入ります。1, 2, 3位ですね。愛知学院大学も90%合格するようになってから、次の年の学力は大変上がったというか、受験生が増えたということが検証されておりますし、東京歯科大学もこれでもっているようなもので、だからベスト3に入るためには、95%以上を目指さないといけない。そうすると、次の入試ブランド力は自動的に増えてくるから、成績のいい学生が入って来て教育力もうまくいって、CBTも一発で通る。そういうふうな感じですね。そこで、この国試95%の学士力のためには、病院実習が真中にありますね。5年、6年を同時に、上手に動機付けして、同じ場所で教育すれば、医療倫理も学習させて、そういった教育力でやれば、更に学士力が上がるのではないかと。従って、国家試験も95%以上いけるのではないかとということでございます。

(はい、次お願いします。)

次は、やはり同じことです。教育力とCBT学力と学士力の、これを向上させないといけない。これみんな学力と教育力ですけどね。それから、カリキュラムは学年制に今度変えないといけないということで、これは大分そういう意見が出てきております。

3番目は、第1, 第2学年の教育力アップで留年を減らしていくということで、もう最初の1年生、2年

生の時の教育が大事なのだということで、心ある教授から、そういうアドバイスをどんどん得ていますので、これを主眼にした、またカリキュラムの改正を行わないと、というのがこれからの、できるだけ急務となっています。

**大学存立危機からの脱出目標** 重点計画

**I. 教学-b**

1. 教育力, CBT学力, 学士力の向上目標
2. カリキュラムの学年制化で教育力アップ
3. 第1・2学年の教育力アップで留年減少化
4. 第5・6学年 - 病院と同一学舎で教育し、学士力アップで国試に臨む。

もう一つは、5 学年と 6 学年を病院と同一学舎で教育して、そうすると先輩もいることだし、先生とのコンタクトの時間も長くなるし、夜でも先生を訪ねて行けるしということで、更に学士力がアップして国家試験の成績が上がると、こういうところでございます。

**—教育・研究等における重点目標—**

(はい、次お願い致します。)

**教員人材育成力の目標** 重点計画

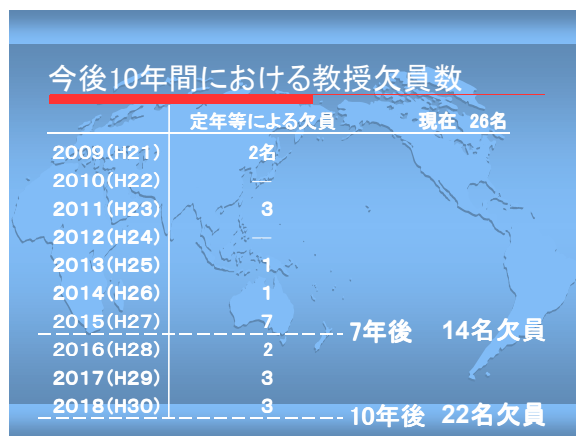
**II. 教員・大学院・研究**

1. 教育・研究を支える人材の育成が急務
2. 教員採用・昇任基準を厳格に遵守
3. 教員人材育成の具体策
4. 海外留学の奨励と帰国後の採用支援
5. 科研補助金等の申請を義務づける。

次は、教員・大学院・研究というスライドIIの問題です。人材育成のことですね。人材育成が、またこれが急務になっております。教員の採用とか昇任基準をできるだけ厳格に、もう人がいないから基準を甘くしてあげるではなくて、やっぱりこの基準を厳守して、これをここまで追いつかないと上に上がれないというふうにししないと、学生から見ても、どうもそれは見抜

かれてしまうということで、教員力が、あるいは教育力が落ちてくる危険性がある。教員人材育成の対策というのは後でちょっと述べます。海外留学の奨励と帰国後の採用支援。これは先程から言っている。科研費の申請の件、これも、もうあと一歩で、後13人が残っていましたけれども、ほぼ100%の・・・。

(はい、次お願いします。)



なぜ、人材育成のことを喧しく言うかということ、本学の今後10年間において教授がやめて欠員になる数をずっと見てみましたら、思わずぞっとするぐらい大勢、団塊の世代で固まっております。今年、私ともう一人の2名で、来年はない、再来年は3人ということ、次はないということで、そのあと1、1ときてここで7。すなわち7年後には合計しますと、14名の方が入れ替わるというか、欠員になると。考えようによっては。更に、10年後を見てみた場合の合計数が22名、現在教授は26名おりますから、26名中22名、4名だけ残り、ほぼ全員入れ替わるのですね。入れ替わる人が問題なのですね。そういう人がどういうレベルの教員か。いわゆる、高度化した活動ができる教員を入れ替えた場合には、将来の本学は非常に明るいという感じになりますので、これはもう急務といえますか、喫緊の問題であると思っております。

**—教員の任用について—**

(はい、次お願いします。)

それで、教員人材育成と意欲。この上ってくる助教とか講師とか准教授が意欲を持って将来設計をするためには、教員の職階ごとの任用、これを明確化して、すなわちキャリアパスが上がっていくように、本学に

奉職して尽力いただくという式にならないかということで、それも今検討しているところでございます。

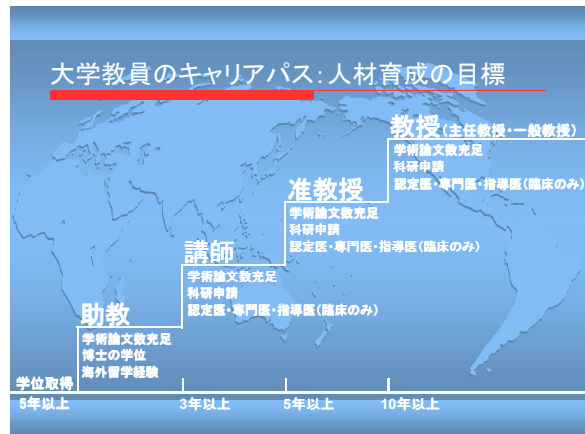
**教員人材育成・意欲向上の具体策**

1. 教員職階ごとの任用(昇任・再任)基準の明確化ーキャリアパス
2. 教員資格の一本化(一般教育系, 基礎系, 臨床系, 病院)
3. 講座・教室所属外でも教授を選出できるようにする。
4. 大学院修了者の海外留学後の教員採用制度を設ける。

もう一つは、教員資格の一本化ですね。これも、病院の教員は研究しなくてもいいのだとか、あるいはこっちではやるのだとか、あるいは一般教育系は学位はなくてもいいのだとか、そういうことに本学はなっているのですが、昔ならばそれでもいいのですが、そのために、非常に、一番厳しくしなければいけないであろう基礎系と臨床系の方が甘くなってしまうんですね。両脇に甘い所があるから、どうしてもそういうのができてしまう。それでは不公平だということで、随分とそういう声がこれから上をめざして進んで行こうとする、教育・研究を進めて行こうという、進む者にとって、非常にアンバランスで不公平な状態に今、映っているようです。

ですから、現在の講座、教室所属外でも教授を選出できるようにする。これも、もう全国で四つ、五つの所が、もう教授のそれぞれの働き口でどんどん選出しているのですね。本学はまだそれができていないので、非常にその面では遅れているので、焦りさえ感じているところでございます。公募が学長のもとにどんどん来ますけれども、今まで聞いたこともないような、例えば教育研究室とか、歯科医学教育研究室教授を公募しますので誰か適当な人があったらご推薦くださいとか、あるいは臨床実習専任の教授を作りたいから、その人をご推薦くださいとかというのが、全国からしょっちゅう来ますので、これはちょっと井の中の蛙にならないようにしないといけないと思っております。それからこれも人材育成。

(はい、次お願いします。)



大学教員のキャリアパスというのはこういうことですね。大体学位を取るのには卒業後1年の研修を経て、最短で大学院を出れば4年、5年以上すれば学位は取れます。そうしたら助教という、従来の助手ですね。これに、こういった条件、論文数の充足、博士の学位、それに海外留学経験があるというのは少しメリットがある。そういうのでなれます。そして、3年以上の教育研究歴を踏みますと講師に昇任することができます。その時の論文数も充足しないとイケないし、臨床では、認定医か専門医をどれか一つ持っている必要があるというふうにする。それから、5年以上しますと准教授になれる、10年以上経験を積むと教授になるという、こういうふうにしますと、隣の人が、同級生が何人おるとか関係なしに、よく頑張った人が上へチャレンジできます。中国では、ここでみな講師承認試験とか、准教授承認試験、教授承認試験ということで、クラスから何人もずっと受けるように、ダメだってもまた来年受けようという、こういう条件を満たしてここへ到達しようという、これでいくと15年後、39歳か40歳までに教授になれるということの人生設計も開ける。

(はい、次お願いします。)

考えられている教員任用資格審査基準とかいうのがあって、博士の学位はみんないる。そして、教育研究歴はそれぞれの職階の分である。ここの学術論文・著書というのが、一般教育系では8編以上、基礎系では20編、そのうち欧文論文が10編以上、臨床系では20編、欧文論文10編、臨床論文は5編以内とか、そういう条件をこういうふうクリアしたから、自分でもどうやれば講師になっていけるのだろうかということが

できるわけですね。努力目標ができるわけですね、教員の目標ができる。そういうふうな形にすべきではないかと思っております。

	博士の学位	教育研究歴	学術論文・著書	専門歴など	科研申請
<b>教授</b>					
一般教育系	○	10年以上	8編以上		○
基礎系	○	#	20編以上(英文10以上)		○
臨床系	○	#	20編以上(英文10以上 臨床論文5以内)	○	○
<b>准教授</b>					
一般教育系	○	5年以上	4編以上		○
基礎系	○	継続した3年以上	10編以上(英文5以上)		○
臨床系	○	#	10編以上(英文5以上 臨床論文2以内)	○	○
<b>講師</b>					
一般教育系	○	3年以上	3編以上		○
基礎系	○	継続した3年以上	7編以上(英文2以上)		○
臨床系	○	#	5編以上(英文2以上 臨床論文2以内)	○	○
<b>助教</b>					
一般教育系	○	-	2編以上	-	-
基礎系	○	-	2編以上(英文1以上)	-	-
臨床系	○	-	2編以上(英文1以上 臨床論文1以内)	-	-

—附属病院の財政改善—

(はい、次をお願いします。)

財政等改善の目標

### III. 附属病院

1. 健全経営への新病院システムの活用
2. 健全経営からの臨床研修歯科医師の研修
3. 健全経営からの事務機構の改善
4. 各部署の収支改善策を実行

それから、財政等の改善目標では、附属病院。附属病院は、十分やっていたいのですけれども、やはり更に財政改善を考えていかないと、健全経営から見た各部署の収支改善策を実行しないと、やはり日本で一番赤字率が高いのではないかとということも数値で出ておりますので、これを何とかしないと本学は非常に苦しくなるということがございます。

—教員評価—

(はい、どうぞ。)

今度は組織改革では、教員評価を今井前理事長の時から、こういった教員評価表、それから学生による先生の評価、学生評価表といいますけど、これを実施しないと、本学は基準協会から一応認定されなければ

ども、これがなかったら胸を張っていけないという形のものでございます。それから、教員任用と人材育成の4施策は先程述べたとおりでございます。この二つについて。

### IV. 教員組織改正に伴う対応

1. 教員評価→「教員評価委員会規程」  
\*「教員評価調査表」  
\*「講義に対する学生評価表」
2. 教員任用・資格審査基準を明確化(前述)
3. 人材育成・意欲向上からの4施策(前述)

(はい、次をお願いします。)

教員評価調査表

調査対象期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

有商標歯学会学講座  
教授  
川添登博

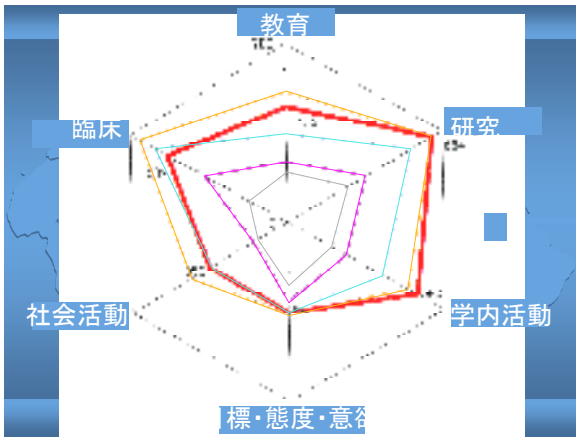
大阪歯科大学

昨年度に、もう大方でき上がっていたのですが、やっとこれでき上がりまして、教授会も承認いただいて、理事会も承認いただきました。教員評価調査票ですけれども、これはもう20年の4月、昨年4月1日から今年の3月31日分までの自分の得点やら、実績をここへ書き込んでいくわけですから、提出するのは今年の4月ですけれども、もうそろそろ1年分を、過去1年分を集計する段階に1月ですので、来ていていると思っております。

(はい、次をお願いします。)

これは、六つのレーダーチャートの頂点からなって、自分はこの臨床、教育、研究、この内の最低二つ、教育と研究でいくか、研究と臨床でいくか、臨床と教育で

いくかということで評価して貰うというように、選ぶことができます。一つを、今年ちょっと臨床に力を入れ過ぎたので研究が疎かだったとか、そういった言い訳を一つ除くことができる。それから、ウエイトが違いますけれども、社会活動、学内活動、目標・態度・意欲といった面も、選択することができるわけですね。これをしてどういうバランスが取れているか、自分で自分の評価を見ることができます。



(はい、次お願いします。)

項目	得点		領域評価 評価点	総合評価	
	前年度	今年度		重み	評価点
教育	250.0	453.0	3	10	30
研究	380.0	654.0	4	10	40
臨床	480.0	532.0	4	10	40
学内活動	350.0	580.0	5	5	25
社会活動	560.0	350.0	2	5	10
目標・態度・意欲	432.0	354.0	3	5	15
合計	2452.0	2923.0	21	45	160

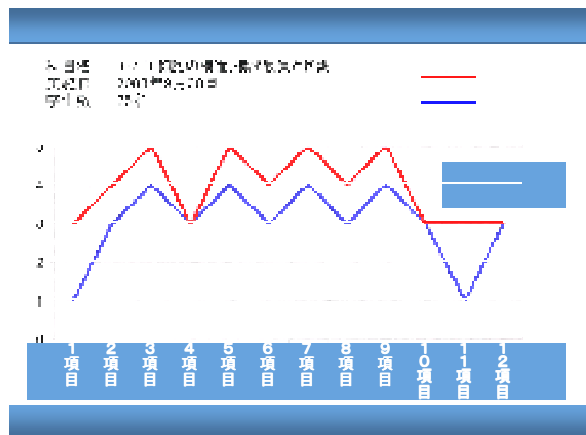
標語 **A**

これは得点ですね。教育、研究、臨床、これを前年度、今年度、得点、ずっとあって、重みづけがあって、評価点が160と書いてありますけれども、これがこの最後の標語と書いてあるところにAというランクが、これはAまたはBであれば任期制にしても、続いて再任できるけれども、これがC以下でありますと再任はできないという、CとかDとかいうのが付くと再任できないという指標でございます。

(はい、次お願いします。)

もう一つ、学生の授業評価ですね。講義に対する学生の評価でございます。これは教員の自己採点と、その講義を受けた学生、全学生からこんなアンケートで、5段階評価で5点が最高で、よい評価から順に、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」というふうなところへ学生が塗りつぶすようになっている。評価項目は、「明瞭で聞き取りやすい講義の話し方でしたか」「要点を明示した解りやすい授業でしたか」「板書・プリント・スライドなどは適切でしたか」「よく準備してから講義しましたか」とか、こういう12項目が入っておりまして、そしてそれを塗りつぶす。たくさん講義する人は初めと最後と、同一科目で初めと終わりに印を付けてもらいます。

(はい、次お願いします。)

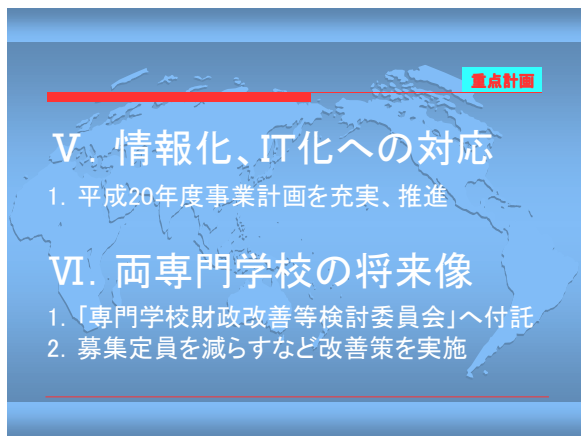


それをチャート化したものがこれですね。科目名があり、これは一例で、特定の人を指しているデータではないのですけれども、こういうふうにして、例えば、



これでは先生の自己評価は“赤”で示されており、かなり5に近いですね、5や4が多い。ところが、“青”で示された学生の平均でいくと、どうも低いという形ですね。これをいきなり、あのレーダーチャートの中に入れて、それで再任の評価というところへ行きますと人気取りの講義だけするようになるので、それはまずいということで、先程の講義に対する学生評価表には、学生がアンケートで評価した内容について、「あなたが書いたということは知らせません」というふうに断ってありますので、先生の方も一応、評価ということにとらわれることなく講義してください。要は、自己評価と学生自身の評価がどの位ずれているかということ、どの位一致しているかということをフィードバックしてもらうことが重要です。評価結果を先生方へ配ってもらいます。学生の書いたアンケートは、もうそれ以上公開したりしません。先生にこれでもって反省すべきところはする、自分で自己評価するところはする。いつもいいところは、またそれは何か報奨を考えていくという形でやるものでございます。

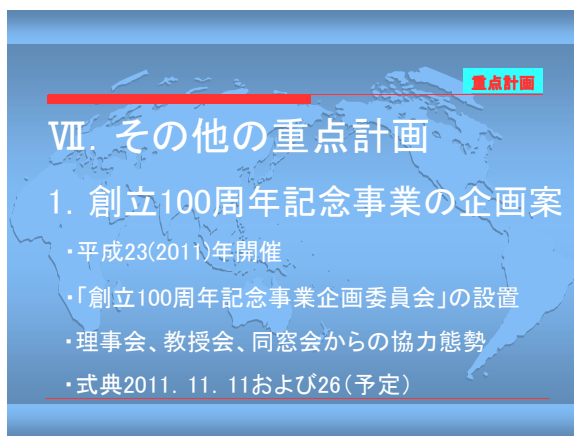
(はい、次お願いします。)



それから、情報化・IT化ですが、これは平成20年度と同じようなのをさらに続けます。それから、両専門学校の将来像ですけれども、これは改善検討委員会、財政改善等の検討委員会へ付託してありまして、それから、今のところ募集定員を減らすなどの改善策とか、いろんなことをやっているところでございます。

### — 100周年記念事業について —

(はい、次お願いします。)



その他として二つございます。創立100周年記念事業の企画案ということで、これはご承知のように平成23年、2011年に開催ということで、この理事会、教授会、同窓会からの協力態勢で集約した形をやろう。できれば寄付を募るといこともしよう。ということで、今のところはこの式典を2011年11月11日と、もうひとつ11月26日の二つでもってやるべきではないかということで、場所押さえをしている段階でございます。

(はい、次お願いします。)



この組織ですね。今井先生の時からこの事業は決まっておりましたので、企画委員会というのが平成22年の3月31日までありますけれども、それがあります。それを終わったら実行委員会に移るといことですね。それで、今度新たに決まったのが、企画小委員会教授会部門といのと、企画小委員会理事会部門といことと二つに分けて、もう一つ同窓会部門といのがもう既にあるのですけれども、それはここと重なる所がありますので、何処かで吸収してもらおうと。教授会部門は、委員長・豊田副学長、副委員長・神原副学長、小

正教授ということで、今年の3月31日までに、スローガンおよび記念事業の主要な柱を決めるということをお願いしてある。

もう一方、理事会でも同じようにスローガンと記念事業を、これを併せてここで決めるということで、委員長には三谷理事になっていただいて、あと理事の方が大勢、殆ど全員入っております。こちら教授が殆ど全員入っておるわけでございます。それを3月31日までにできるだけ早く固めて、実行委員会はそれぞれのお得意のところを手分けして進めて行っていただく、そういった組織で走ろうというところまでいっていません。

—日本歯科医学会総会について—

(はい、次お願いします。)

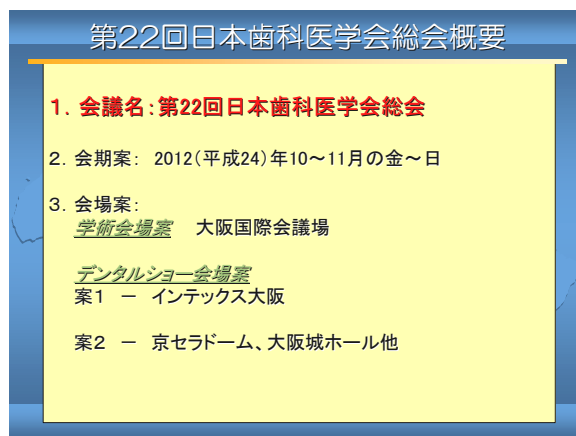


もう一つのその他の事業としては、例の第22回の、今年21回がパシフィック横浜で昨年11月に行われましたけれども、今度は2012年、平成24年の11月に開催される日本歯科医学会総会。これは、本学でいうと25年ぶりの主幹校という形になるわけですね。主幹校に決定は致しております。ただし、これを始めるのは、今年の11月ぐらいから本格的に東京の方と一緒に組織委員会を作ってやるということで、それまではあまりできないことになっております。

(はい、次お願いします。)

これは、そういうことで、同じですね、会場案という押さえだけはしております。会場は国際会議場とリーガロイヤルホテル、それからデンタルショーは二つありまして、インテックス大阪という案と、京セラドーム、大阪城ホール、もう一つ、三つを使うという案

があるようで、収容能力からしてあるようでございます。歯科会のこのデンタルショーというのは、医学会総会のショーよりも、メディカルショーよりも規模が大きいございますので、非常に場所が限られるということのようでありまして。概要はここまでは決まっている段階でございます。



(はい、次お願いします。)



ということで、少し時間が過ぎましたけれども、どうかこういう形で進めたいと思っておりますので、どうかまた間違っているところは、いろいろ教えていただけたら、と思っております。

本当に長々と、新年早々、ご清聴頂きましてありがとうございました。

佐川 寛典 元理事長・学長逝去

平成21年1月15日、かねてより病氣療養中であった本学元理事長・学長の佐川寛典先生が、急性心筋梗塞のため77歳で逝去された。佐川先生は、平成4年から8年間本学の学長、平成5年から13年間理事長を務められた。在任中、楠葉への学舎移転、天満橋の病院新設においてリーダーシップを発揮された。

なお、故佐川寛典先生の「お別れの会」は2月26日(木)午後2時から本学講堂において執り行われる。

第4回 人権啓発標語

人権週間(12月4日～10日)に合わせて、「人権論」を受講している第1学年の学生を対象に、人権啓発標語を募集したところ、47点と昨年の倍以上の応募があり、13点が入選しました。最優秀作には、渡辺裕加さんの「守ろうよ 人の気持ちを 考えて みんなで作る 明るい社会」が選ばれました。12月15日に表彰式が行われ、川添学長から入選者に賞状が授与された。

最優秀作 渡辺 裕加	守ろうよ 人の気持ちを 考えて みんなで作る 明るい社会
優秀作 早川 知佳	ひろめよう! 手と手にぎって いのちの和
優秀作 實達 匡一	相手の気持ちを 考えよう 自然となくなる 差別の心



(前列) 川添学長と最優秀作の渡辺さん

平成20年 秋の叙勲・褒章受章者

平成20年秋の叙勲・褒章者として大阪歯科大学関係の先生方が、以下の通り受章されました。

叙 勲

- 大学 1 回 藤井 辨次 京都府 瑞宝中綬章
- 大学 2 回 橋本 弘一 関東支部 瑞宝中綬章
- 大学 7 回 岡田 廣志 和歌山県 瑞宝双光章
- 大学 8 回 畑崎 衛 大阪府 旭日双光章
- 大学 9 回 中西 久 滋賀県 瑞宝双光章

褒 章

- 大学 19 回 中谷 譲二 和歌山県 藍綬褒章

教職員慰労会

年末恒例の教職員慰労会が12月26日、プラザ14で行われた。川添理事長・学長の挨拶、常務理事の乾杯にはじまり、しばし歓談の時間が過ぎたが、世界的な金融危機による世界同時不況を反映してか、あちこちの歓談も少々湿りがちであった。

理事長賞、学長賞の抽選が行われると、ようやく会場も盛り上がり、拍手と歓声があがった。こうして、今年も1年が過ぎていった。

平成20年度 科学研究費補助金交付  
ならびに学内学術研究助成金交付

平成20年度の科学研究費補助金は新規に14件が採択され、継続分とあわせて34件、直接経費と間接経費を合計すると総額55,233,000円が交付された。研究種目別では、基盤研究(C)が20件(内新規9件)、萌芽研究が継続1件、若手研究(B)が8件(同2件)、若手研究(スタートアップ)が5件(同3件)であった。

また、学内の学術関係では、共同研究助成金は1件で9,700,000円、大学院生に対する学術研究奨励助成金は6件で3,500,000円がそれぞれ交付された。

## ODU NEWS No.152

## 平成20年度科学研究費補助金採択者一覧

研究種目	継続 新規	研究代表者	所属	研究課題名	助成額(円) (上)直接経費 (下)間接経費
基盤研究(C)	継続	岡崎 定司	高齢者 歯科学	バイオミネティックマトリックスによるチ タンインプラントの機能制御	900,000 270,000
基盤研究(C)	継続	野崎 中成	薬理学	多能性歯髄幹細胞の可塑性を利用した再生 に関する基礎的研究	700,000 210,000
基盤研究(C)	継続	大浦 清	薬理学	白血球によるLPS誘発性サイトカイン産生に おけるアデノシン受容体の発現変動	1,500,000 450,000
基盤研究(C)	継続	橋本 典也	歯科理工学	インジェクション型アルギン酸/TCPピーズ 複合体を用いた新規骨再構築法の開発	1,500,000 450,000
基盤研究(C)	継続	武田 昭二	歯科理工学	フェムト秒レーザーによるチタンインプラ ントのナノ表面改質	1,300,000 390,000
基盤研究(C)	継続	西崎 宏	欠損歯列 補綴咬合学	電鍍テレスコープの維持力発現機構の解明	600,000 180,000
基盤研究(C)	継続	今井 弘一	歯科理工学	ヒトの代謝活性因子を導入した歯科生体材 料の発生毒性試験	1,400,000 420,000
基盤研究(C)	継続	西川 哲成	口腔病理学	理想的な足場材料サンゴ、その特性と新生 骨形成	1,300,000 390,000
基盤研究(C)	継続	覚道 健治	口腔外科学 第二	圧縮ストレスによる顎関節滑膜の応答と顎 関節症発症メカニズムの解析	800,000 240,000
基盤研究(C)	継続	堂前 尚親	内科学	歯周病と生活習慣病の双方向性発症幾序の 解明	1,500,000 450,000
基盤研究(C)	継続	長野 豊	内科学	口腔の健康状態と生活習慣病との関連の解 明ー歯周炎の早期発見・治療への応用ー	1,000,000 300,000
基盤研究(C)	新規	桧枝 洋記	生物学	唾液腺上皮管腔形成におけるタイトジャン クション分子クローデインの役割	1,200,000 360,000
基盤研究(C)	新規	合田 征司	生化学	慢性歯周炎進展機序におけるT細胞浸潤の 役割についての解明	1,500,000 450,000
基盤研究(C)	新規	好川 正孝	口腔治療学	歯髄・象牙質複合体再生のためのスポンジ 状担体の開発と担体内骨形成促進因子	1,700,000 510,000
基盤研究(C)	新規	吉川 一志	歯科保存学	レーザー高吸収体配合う蝕検知液を用いた う蝕の選択的除去	1,400,000 420,000
基盤研究(C)	新規	呉本 晃一	欠損歯列 補綴咬合学	線維芽細胞増殖因子が歯髄幹細胞の機能と 分化を制御する	2,300,000 690,000
基盤研究(C)	新規	前田 照太	欠損歯列 補綴咬合学	有床義歯による咬合支持の回復が唾液中の 免疫グロブリンと神経成長因子に及ぼす影 響	1,500,000 450,000

研究種目	継続 新規	研究代表者	所 属	研 究 課 題 名	助 成 額(円) (上)直接経費 (下)間接経費
基盤研究(C)	新規	宮前 雅見	内科学	周術期の吸入麻酔薬とアルコールによる心筋保護相乗効果のメカニズムと臨床応用の解明	1,200,000 360,000
基盤研究(C)	新規	鎌田 愛子	生化学	歯周組織再生に及ぼすアディポサイトカインの影響	1,700,000 510,000
基盤研究(C)	新規	田中 昭男	口腔病理学	新規骨形成剤ペプチドによる歯周組織再生	2,000,000 600,000
萌芽研究	継続	中村 正明	歯科理工学	SiRNAによる歯周組織再生の試み	1,400,000 -
若手研究(B)	継続	川崎 弘二	口腔衛生学	感染象牙質の除去に対する光蛍光誘導定量法の応用	900,000 270,000
若手研究(B)	継続	浅井 崇嗣	高齢者 歯科学	円滑な喉頭挙上を發揮できる咬合高径の決定	100,000 30,000
若手研究(B)	継続	井上 太郎	高齢者 歯科学	リン酸塩系埋没材を用いた焼結鋳型によるCPチタン鋳造	400,000 120,000
若手研究(B)	継続	山本さつき	欠損歯列 補綴咬合学	咬合の変化が精神不安に及ぼす影響	600,000 180,000
若手研究(B)	継続	渡邊 京子	小児歯科学	乳歯歯髓由来線維芽細胞の炎症応答におけるアデノシンの機能的役割	1,500,000 450,000
若手研究(B)	継続	土居 貴士	口腔衛生学	乳歯初期う蝕モニタリングシステム構築のための基礎的研究	800,000 240,000
若手研究(B)	新規	川本 章代	高齢者 歯科学	徐放キャリアとしての高分子多糖の有用性	1,700,000 510,000
若手研究(B)	新規	本田 領	歯科矯正学	新規ナノセンサによる口腔洗浄の洗浄力評価法	1,900,000 570,000
若手研究 (スタートアップ)	継続	堂前 英資	生化学	破骨細胞前駆細胞のトランスマイグレーションに細胞接着分子が及ぼす影響	1,340,000 402,000
若手研究 (スタートアップ)	継続	西田 尚敬	歯科保存学	熱プラズマCVDによるジルコニア系傾斜化複層機能材料の開発	1,320,000 396,000
若手研究 (スタートアップ)	新規	森 亮一	薬理学	組織修復及び炎症反応によって発現誘導されるmiRNAの同定及び機能解析	1,340,000 402,000
若手研究 (スタートアップ)	新規	奥田 恵司	欠損歯列 補綴咬合学	歯の喪失が学習・記憶能に及ぼす影響ー海馬グルタミン酸測定による検討ー	1,170,000 351,000
若手研究 (スタートアップ)	新規	竹安 正治	小児歯科学	歯髓幹細胞における多分化能の解析	1,340,000 402,000
合計 34件 (内 継続20件)					42,810,000 12,423,000

ODU NEWS No.152

平成20年度共同研究助成採択課題

新規 継続	研究代表者	研究分担者 (*幹事)	研究協力者	研究課題	助成金額 (千円)
新規	福島 久典	山中 武志*、山根 一芳 真下 千穂、杉森千恵子 上田 雅俊、高津 兆雄 林 宏行、吉田 匡宏 森田 章介、山本 一世	C. B. Walker K-P. Leung	口腔バイオフィルムの解明	9,700

平成20年度 大阪歯科大学学術研究奨励助成金採択一覧 (大学院生)

氏名	専攻	学年	研究課題	助成額 (円)
竹内 撰	歯科保存学	第4学年	歯髄細胞における炎症性サイトカインの影響	600,000
伊藤 秀高	欠損歯列 補綴咬合学	第4学年	口蓋床による不快刺激が唾液中ストレス反応物質に及ぼす影響	600,000
吉門 良祐	口腔外科学 第一	第4学年	NK細胞の細胞殺傷能におけるインテグリンの関与	600,000
嶋田 景介	口腔外科学 第二	第4学年	インプラントの埋入時における新生骨再生過程に及ぼす多血小板血漿の影響	600,000
居波 薫	歯科矯正学	第4学年	破骨細胞の分化誘導における細胞内シグナル伝達系の関与	600,000
稲村 吉高	歯科麻酔学	第3学年	心筋虚血再灌流障害に対するセボフルランポストコンディショニングの有無とアプロチニンの効果	500,000
計 6件				3,500,000

学位(博士)授与報告

森川 康之 乙第1506号 (平成20年6月25日)

歯列矯正装置が磁気共鳴画像に及ぼす影響についての検討

肥後 文章 乙第1507号 (平成20年6月25日)

口腔インプラント臨床に応用するためのリン酸カルシウム骨ペーストに関する基礎的研究

河野 慈元 乙第1508号 (平成20年6月25日)

Influence of uncomfortable removable partial dentures on stress hormone in saliva (局部床義

歯の不快症状が唾液中のストレスホルモンに及ぼす影響)

黒木 克哉 乙第1509号 (平成20年6月25日)

大きさが異なるβ-TCP顆粒の骨欠損修復過程に関する実験的研究

田中 毅彦 乙第1510号 (平成20年6月25日)

Influence of age-related changes in nitric oxide synthase-expressing neurons in the rat supra-optic on inhibition of salivary secretion (ラット視索上核における一酸化窒素合成酵素陽性ニューロンの加齢変化が唾液分泌抑制に及ぼす影響)

藤井 隆史 乙第1511号 (平成20年6月25日)

コラーゲン誘導関節炎ラットの顎頭軟骨における細胞外マトリックスの変化と MMP-3 の発現

多名部 実 乙第1512号 (平成20年6月25日)

Quantitative light-induced fluorescence clinical study on how fluoride dentifrice affects the progression of white spot lesions (初期う蝕病巣の進行・回復に及ぼす初期脱灰程度の影響)

小室 美樹 乙第1513号 (平成20年6月25日)

全身の健康に関連性をもつ歯周組織の健康状態

久山 晃司 乙第1514号 (平成20年9月24日)

有限要素法による小児期の咬合育成に関する研究 - 吸指癖による上顎歯列および顎骨への影響 -

加藤 秀治 乙第1515号 (平成20年9月24日)

Quantitative real time RT-PCR 法による *Prevotella intermedia* heat shock protein 関連遺伝子の発現解析

本山 浩司 乙第1516号 (平成20年9月24日)

*Prevotella intermedia* 由来リコンビナント GroEL タンパクの作製

西村 耕一 乙第1517号 (平成20年9月24日)

臨床から分離したバイオフィルム形成性 *Streptococcus intermedius* の分子生物学的解析

石田 哲也 乙第1518号 (平成20年9月24日)

高野楨エタノール抽出液の口腔細菌に対する抗菌活性

浅井 崇嗣 乙第1519号 (平成20年9月24日)

下顎位の変化が嚥下時の咬合接触に及ぼす影響

前田潤一郎 乙第1520号 (平成20年12月24日)

Effects of PI-3K in integrin activation stimulated by CXCL12 (CXCL12 刺激によるインテグリン活性化における PI-3K の影響)

北郷 理恵 乙第1521号 (平成20年12月24日)

徐放化骨形成因子を用いた顎裂閉鎖術に関する実験的研究

### 図書館 HP 更新

11月より図書館のホームページが更新され、利用機能もアップしましたので、一度ご覧ください。

まず、携帯電話から(Mobile OPAC)、開館状況、蔵書

検索、貸出状況などの利用状況の照会(ID・PW 要)ができるようになりました。次に、蔵書検索機能がアップしました。雑誌を検索すると、購入している電子ジャーナルにつながるようになり、また、一度の検索で全国の大学の蔵書も同時検索できるようになりました。さらに、検索スピードもアップし、インデックス機能により表記のゆれや異字なども、一度で検索できるようになりました。3月末にも、バージョンアップを予定しています。

新システムになってから、学生の蔵書検索の利用が増えていますが、それにもまして図書館最大のトピックスは、11月の入館者が月間入館者数で初めて1万人を超え11,524人(平日1日平均600人)になったことです。これまで8,435人が最多でしたので、一挙に約3,100人増加したことになります。対応に追われながらも、うれしい悲鳴を上げています。



### 第40回 大学祭

今年は下記の日程で、体育祭は牧野学舎で、また大学祭である楠葉祭は、楠葉学舎で行われた。

- 日 程 ・体育祭：10月25日(土)
- ・楠葉祭：11月 1日(土)・2日(日)

楠葉祭の初日は、音楽系クラブの演奏会、芸能人野外ステージ、無料歯科検診等が行われた。2日目は講堂において、有名芸能人によるライブが盛大に行われ、多くの観衆が集まった。また、オープン・キャンパスも同時に開催され、多くの参加者があった。例年、大好評の抽選会を最後に、今年の大学祭は無事終了した。

クリスマス・ミニコンサート開催

12月19日(金)午後6時から、病院1階エントランスの一角で、有歯補綴咬合学講座の更谷先生とその仲間たちによるクリスマス・ミニコンサートが開催された。病院の教職員や入院患者さんも集い、1時間余り、皆さん耳を澄ませて和やかなひとときを過ごした。



更谷先生とその仲間たちによる演奏

人 事

昇 任

歯科理工学講座	教授	武田 昭二
欠損歯列補綴咬合学講座	教授	岡崎 定司
	以上	H. 20. 10. 1付
口腔解剖学講座	准教授	隈部 俊二
		H. 21. 1. 1付

教員採用

耳鼻咽喉科学講座	准教授	久保 伸夫
生理学講座	講師	平野俊一朗
薬理学講座	講師	戸田 雅裕
細菌学講座	助教	南部 隆之
歯科麻酔学講座	助教	讃岐 拓郎
耳鼻咽喉科学講座	助教	竹田 浩子
	以上	H. 20. 10. 1付

依願退職者

耳鼻咽喉科学講座	講師	毛利 大介
		H. 21. 1. 31付

大学院教員任用

大学院准教授	西川 哲成
大学院助教	谷本 啓彰
	初岡 昌憲
	以上 H. 20. 10. 1付
大学院教授	武田 昭二
	岡崎 定司
	以上 H. 20. 12. 1付

職員採用

経理課	課長 中尾 昌彦
	H. 20. 10. 1付

委 嘱

教務部委員会委員	武田 昭二
	岡崎 定司
	以上 H. 20. 11. 12付
ブラッシュアップ委員会委員	辻林 徹
	藤原 眞一
	以上 H. 21. 1. 28付

講師(非常勤)委嘱

大学院歯学研究科	
細菌学	石田 哲也, 西村 耕一
	加藤 秀治, 本山 浩司
	以上 H. 21. 1. 1付
歯科衛生士専門学校	大島 浩
	H. 20. 10. 1付
	岩本 尚子
	森本 鹿子
	以上 H. 21. 1. 1付

あ と が き

—余談—

また、今年も1年間よろしくお付き合いください。

大阪歯科大学広報 第152号  
 発行日 平成21年1月31日  
 編集発行 広報委員会  
 〒573-1121 枚方市楠葉花園町8-1  
 電話 072-864-3111